

生涯発達心理学

第2回

第2講 生涯発達心理学の理論 成長・成熟の過程

発達に関わる心理学の理論

○学習理論

: パブロフ、ワトソン、スキナー

○認知発達理論

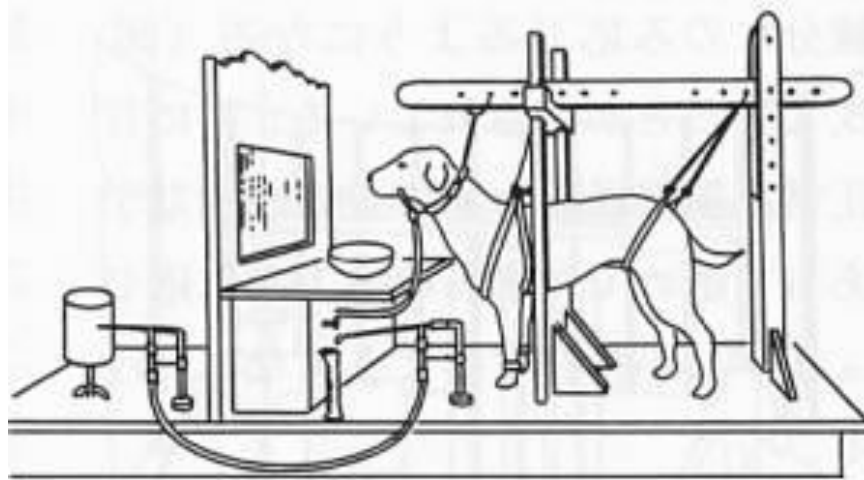
: ピアジェ

○比較行動学、比較発達心理学の理論

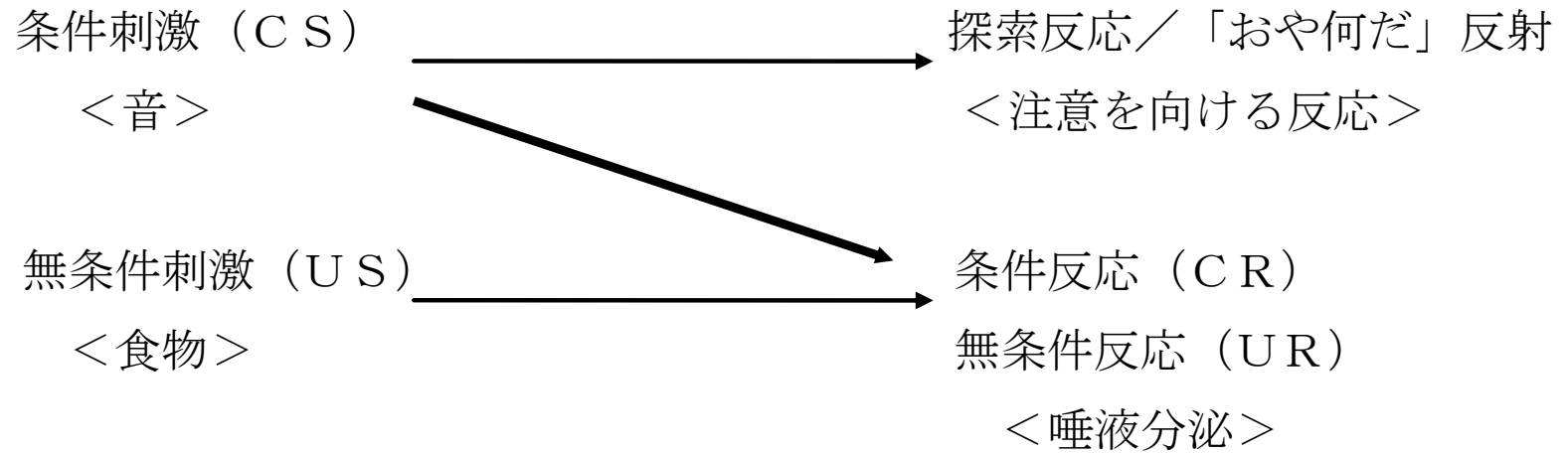
学習理論(学習の型)

1. 古典的条件づけ

○条件刺激が条件反応を形成すること
レスポナント条件づけとも呼ばれる



パブロフの古典的条件づけの
実験装置



無条件刺激(US) — URを引き起こさせる刺激

無条件反応(UR) — USによる引き起こさせる
生得的反応

条件刺激(CS)

条件反応(CR)

強化 — CRの強度を増すためのUSとCSの対
提示の手続き



白いものが怖くなる！

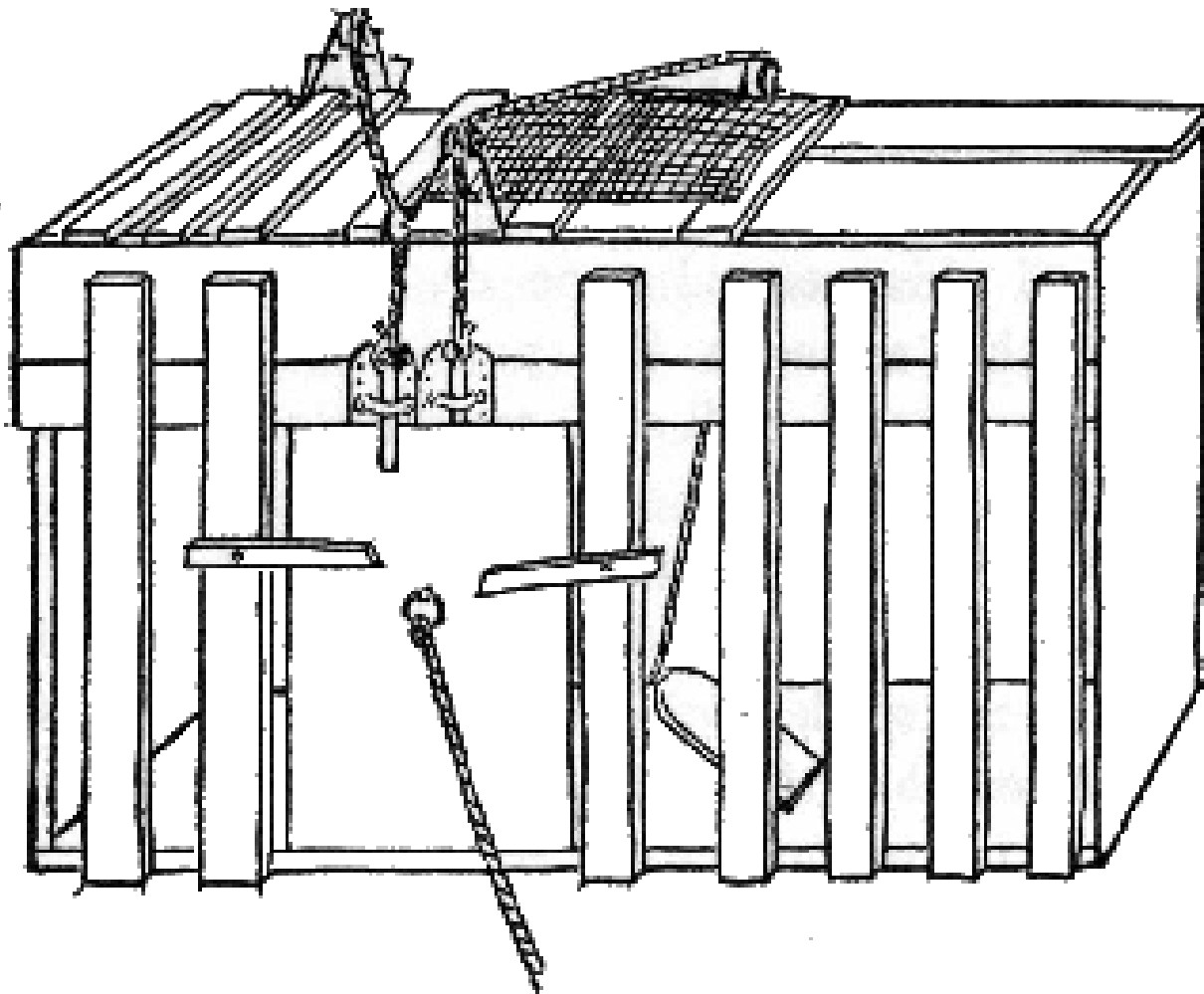
恐怖条件づけの実験 (Watson & Rayner, 1920を
Thompson, 1952が改変)

試行錯誤学習(ソーンダイク)

偶然の成功から無効な行動が排除されて課題解決に必要な行動が残されてゆく過程

効果の法則(law of effect)

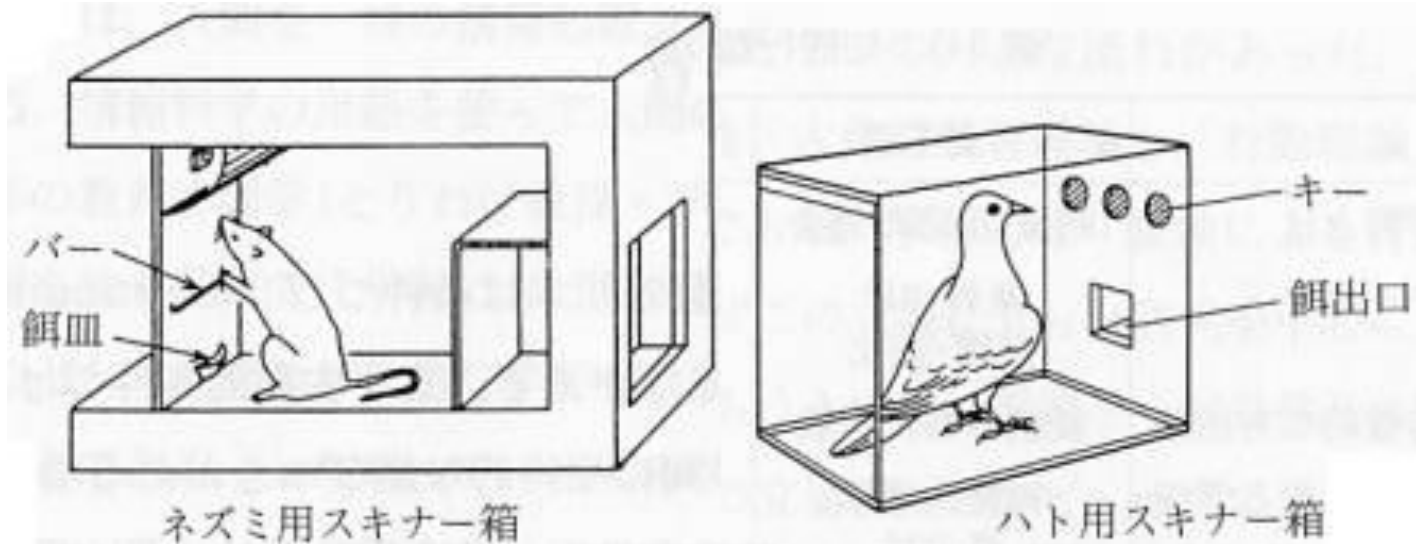
「ある状況に対してなされた反応のうちで、動物に満足を伴うか、直後に満足を与えるような反応は他のものが等しければ、その状況に一層強固に結合され、この状況が再び生ずると、その反応はもっと生じやすくなる」



ソーンダイクの問題箱

2. オペラント条件づけ

オペラント条件 (operant conditioning) づけとは
一定の強化によって環境に対して自発する行動が形成され、その自発する行動の出現頻度が増大すること



オペラント条件づけの実験装置 (スキナーボックス)

オペラント条件づけの例

ペットの躰や芸

「おすわり」という号令：弁別刺激
(ふせ、おあずけという号令も弁別刺激)



おすわりをする：オペラントの自発

↓↑(強化)

クッキー：強化子

3. 洞察による学習

洞察学習

課題場面の問題解決に至るのに試行錯誤の過程を経ずにそれまでの行動とは不連続に解決行動に至ること

→洞察による場の再体制化がなされた。



洞察学習の例
(Köhler, 1917)

4. 観察による学習

人間の場合、見聞のみで学習が成立するという観察学習の現象がある

→社会的学習の特徴として、学習の前半過程にモデルの示範を受け、後半の過程を経ずに学習が成立

図 3-6 攻撃行動（らんぼう行動）の観察学習



(出所) Bandura et al., 1963 より。

※代理強化

他者が受ける賞罰による強化

攻撃行動の観察学習
(Bandura, 1963)

ピアジェによる認知発達理論

子どものこころが大人のこころと質的に異なっていること、発達を生活体と環境との相互作用によって漸進的に構成される過程であると考えた。

発達の要因を成熟・経験・社会とし、これら三つの均衡化が重要であるとした。

基本的な均衡化として、

- 外界に生じた不均衡を自己の内部に取り組む方向である**同化**
- 手持ちの方法(スキーマ)で同化できない場合は自分のスキーマを変更することによって均衡化を回復しようとする**調節**。

ピアジェは認識の発達に関して

感覚運動期(0歳～2歳)

前操作期(2歳～7歳頃)

具体的操作期(7歳頃～11,12歳頃)

形式的操作期(11,12歳頃～15歳頃)

の4つの段階に区分している。

感覚運動期(0歳～2歳ぐらいまで)

最初の認知的段階である感覚運動期は目で見ることのできる活動(知覚刺激と身体運動の協応)に基礎を置く。

→子どもは目の前で起きている出来事については理解できるが、自分が他の事物と同様に空間を運動している一つのものに過ぎないことは理解できない。

実際の活動を通してのみ理解が可能となる。

このような中で子どもは対象が見えていないときでもそのものが存在しつづけるという対象の保存を認識を獲得していく。

前操作期(2歳くらい～7歳くらいまで)

2番目の時期の前操作期は子どもが対象の保存について理解できるようになる時期である。

→この時期には「**表象**」という資質を獲得し対象の保存の発達を促進していく。

子どもは目の前に対象が存在しなくても、心的スキーマを構成できるようになる。

人の行為をしばらくたってからまねをする**延滞模倣**
簡単な問題を直観的に解決する**見通し学習**ができるようになっていく。

さらに**ごっこ遊び**やもっとも重要な**言語**を獲得していく。

具体的操作期(7歳位～11歳位まで)

具体的操作期は、与えられた事象に対して自分の考えを協調させ体系化させる能力を獲得する時期。

操作というシエマの一種を用いて、実際に活動を起こさなくても頭の中で考えること可能となる。また、状態や状況の移行という**変換**が可能となり、変換されたものを元に戻すという**可逆的**な操作も可能。

形式的操作期(11歳以降)

この時期の特徴は課題に含まれる事象について可能な限りの組み合わせを考え、関連のないものをはずしていくとすることができるようになる。

さらに具体的な操作で考えるだけでなく仮説的に考えたり、抽象的なものについても考えることができるようになる。

比較行動学と発達

比較行動学(エソロジー)

人間も含め様々な動物の行動についての生物学的比較研究のことである。対象をできるだけ自然の環境・生活場面において自然観察を行い、そこから種に固有な行動様式に着目して行動目録を作り、分類・分析を行う。

近年では、分子生物学の知見を取り入れ、脳・神経系のレベルでの研究が行われている。